

聖書:士師記3章12~31節

説教:救う者を与える神

1 聞き従わないイスラエル

1) 「私たちは主に仕えます」

イスラエルが神の約束の地であるカナンにまさにこれからはいろいろとするとき、神はヨシュアの口を通してこのように語りました。「今、あなたがたは主を恐れ、誠実と真実をもって主に仕え、あなたがたの先祖たちが、あの大河の向こうやエジプトで仕えた神々を取り除き、主に仕えなさい。」(ヨシュア記24章14節)もしそれがいやならばあなた自身が仕えたいと思う神を選んでそれに仕えなさい。この問いかけに対して民たちは、「いいえ。私たちは主に仕えます」と迷うことなく告白し、実際にカナンの地に入ったときは、周りにはバアルを初めとする様々な神々があったのですが、それらに誘惑されることなく主に仕えていきました。

2) 主の目に悪であることを行う

荒野を旅してきた世代はそうにできたのですが、やがて世代交代が進み子どもの世代、孫の世代になっていくと様子が変わります。彼らは親からは神の話は聞いていたかもしれませんが、主の恵みを直接には経験していません。簡単に異教の神々に誘惑されて、主を捨ててほかの神々を拝んでいきます。それで12節にあるように、「彼らは主の目に悪であることを重ねて行つて」いきます。これに対して神はどのようなことをされたのか。そこにどのような神の恵みがあるのか。ともに考えてまいります。

3) わざわいの神なのか?

12節を読みます。「イスラエルの子らは、主の目に悪であることを重ねて行つた。そこで主はモアブの王エグロンを強くして、イスラエルに逆らわせた。彼らが主の目に悪であることを行つたからである。」

日本には神がたたるという考え方があって、これもそれに似ているように見えます。一つの例を挙げます。受験の神さまとして神社に祭られていて有名な菅原道真という人がいます。彼は学問に秀でた有能な官僚であったのですが、周囲からねたまれて地方に左遷させられてしまい、そのことを恨みながら死んでいく。その後、宮中で次々と災害や病気で死ぬ人が続いたことから、これはきっと道

真のうらみが霊となってひとびとにわざわいをもたらしているのだと言うことになり、それを鎮めるために神社が建てられたとされています。悪いことをしたので、わざわいをもたらされるという点では、ここはなんとなく似ている。でも決定的に違う点があります。それが何かこれから考えていきます。

イスラエルの子らが主の目に悪であることを行つたので、神はイスラエルにわざわいを引き起こします。ヨルダン川をはさんでイスラエルの南東にあたるモアブの王であったエグロンが攻めてきて、イスラエルを支配し、十八年間、毎年貢ぎ物を納めさせる。こういうとき支配者というのは、イスラエルが敵に逆らうよな力を持ってないようにするために、非常に重い税金を課すわけです。イスラエルにしてみればこれはわざわいです。

2 主に叫び求める

1) 救助者を与える

こんなときどうするか。イスラエルは主に逆らつてバアルの神々を拝んでいたのですから、普通はバアルの神々に助けを求めるはずですが、おそらく最初はそうしていた。でもいつこうにも事態は改善されない。ますます税金は重くなっていく。そうしたとき、イスラエルは最後に主に叫び求めていきます。かつて自分たちの親の世代、祖父母の世代は何を信じていたのか。苦しみの中で日々考えるうちに思いだしたのかもしれませんが、バアルの神々は何の助けにもならないのなら、親たちが主と呼んでいた神に助けを求めてみよう。おそらくそのような単純な動機だったと思うのです。そうしたらそうしたらどうなったか。神は、左利きのエフデを救助者として与えます。彼の働きはここに書かれているとおりです。エフデは自分が左利きであることをモアブ王エグロンに悟られないように注意して振る舞っていたはずですが、エグロンが、「あなたに神のお告げがあります」とエフデが言うのを聞いて立ち上がったとき、エフデが左手を右ももの方に伸ばしてもなにもおかしいとは思わない。そのように油断をさせておいてエグロンを倒していく。このようにしてイスラエルは奇蹟的に苦しみから救われていきました。

2) どんな者に与えるのか

まとめれば、ここには二つのことが示されています。一つ目。今言いました。主に叫び求めたと言っているけれど、主とはだれのことなのか、どのような神であるのか、ほとんどわかっていないのです。わかっていたのならとうの昔に主に従っていたはずでしょう。わかっているなくても、とにかく苦しいので主に叫び求めたら、主は一人の救助者を与えた。これが一つ目です。

二つ目。主に叫び求めた人たちは良い人たちだったのなら、まだ納得できます。でも、彼らは主の目に悪であることを重ねて行っていた人たちです。なにも知らないでやっていたというのなら、まだ許せる。でもそうではない。親の世代が「自分たちは主にだけ仕えます」と誓っていた、その子どもたちです。少なくとも親の世代までは何がよくて、何が悪いのかはつきり分かっていた。わかっていたのに、その子どもたちは主の目に悪であることを行った。

例えていえばこういうことです。周囲の忠告を聞かないでギャンブルにはまり、自分のお金だけでは足りず、危ないところから借金をしてそれも返せなくなって、反社会的勢力からいのちを狙われる。そんな人が皆さんの所に助けに来てくれと言ってきたらどう思いますか。同情などできないでしょう。

ところが神は、あれほど逆らっていたイスラエルの人たちに救助者エフデを与えます。先ほどの例えに戻れば、ギャンブルで借金だらけになっている人が泣いて助けを求めてきたときに、かわいそうに思っ借金をゼロにする。そういうことです。そんなことありえますか。でも、神はなさる。よく旧約聖書の神は厳しい神であると言われます。ところがここを読むと、厳しい神どころか、甘すぎる神に見えます。ここで助けることが本当のイスラエルのためになるのか。そんな心配をしたくなる。そして実際どうなったか。4章1節を読むと「イスラエルの子らは、主の目に悪であることを重ねた行った」とあるわけです。彼らは折角の学ぶチャンスがあったのににも学んでいない。喉元過ぎれば熱さを忘れるで、少し平和になるとまた元の状態に戻ってしまう。神は甘すぎる。もっと懲らしめるべきではないのか思いたくなる。

3 本当の神

1) だれが私たちを救えるのか

もちろん神はそうにすることもできたはずで。でもそうしません。彼らが主に叫び求めたとき、すぐにエフデと呼ばれる救助者を与えました。イスラエルが懲りずにまた主に逆らっていく

ことが分かっているのにそうするのです。不思議に思いませんか。神は、あるときはもうこんな子どもには我慢ができないと言って怒り狂い、あるときは子どもが泣き叫ぶのを見てかわいそうだと思っ甘いお菓子を与える。そんなころころ心変わりをして一貫性のない方なのでしょう。

そうではありません。神は最初から、イスラエルが自分たちのしたことを心から悔い改めて主に立ち返るとは思っいません。困ったときだけに主に叫び求め、それを過ぎればバアルにまた心をなびかせていく。それを知っている。それでもイスラエルを見捨てない。悔い改めようとしないうイスラエルですから、神の訓練は何の効果もない、無駄なことを繰り返しているようにも見えます。でも神は諦めません。なんどもなんども私たちと関わり続けます。なぜそこまでするのでしょうか。

どの神が私たちを本当に救えるのか。そのことに気がつかせるためではないでしょうか。そのために、神はとことん時間をかけて根気強く私たちに語り続けます。主を信じなさい。主こそ私たちの救い主です。あなたがたはほかの神々を拜んではならない。それらに仕えてはいけません。イスラエルはそのことを耳で聞いて知っていました。知ってはいたけれど、いつの間にか忘れてしまいました。言っ聞かせても忘れてしまうのであれば、思い出させるしかありません。どうやったら思い出さるか。残念ながら痛い目に遭わなければ思い出さない。

2) この方に祈り願うならば

先日入院をしたとき、まさにこのことを私自身が経験することになりました。水曜日に大腸ポリープを取る手術が無事に終わり、木曜日は絶食、金曜日の朝初めて食事が出る。そこまでは順調だったのですが、そのあと出血して便器が真っ赤になったのを見たとき、目の前が真っ暗になりました。医師に知らせると、どこから出血しているかを調べて血を止めなければならないということで、緊急にもう一度内視鏡を入れることになりました。それを待っている間私はとても不安になりました。もしかして死ぬのだろうか。手術台に寝かせられてお尻を出して医療チームに任せるしかほ。どう考えても自分で自分を救うことはできません。では何ができるのか。一つしかない。祈ることしかできないわけです。では、いったいだれに対して祈るのか。

私の生涯でいのちに関わることで真剣に祈らされたのがこれまで二回ありました。一度目は妻が

出産で大量出血して死にかけたとき。二度目は息子が中一の時に肝臓の病気が原因で、ものが食べられなくなって死ぬかも知れないと思った時でした。そして今回が三度目となった。非常に単純な祈りです。「主よ。出血しているところに御手を置いてくださって癒してください。」そのように祈るしかない。そうこうしているうちに医師がやって来て、内視鏡で調べはじめました。ところがどこをどうさがしても出血しているところが見つからない。私の腹は真っ黒ですが、出血に関して言えば真っ白だった。これには医師も不思議がっておりました。とにかく出血していないわけですから治療はありません。大騒ぎしたわりには、結果はあつけない。後は様子を見ましょうということになり、そのまま退院になりました。

三十数年前、妻が死にかけたとき、私はまだ主である方を知りませんでした。どの神に祈ってよいのか分からなかった。わからなくても、とにかく妻を助けてください、と自然に口から出たのを覚えています。あのときは知らなかったけれど、後から知りました。あの祈りを主であるイエス・キリストが聞いてくださっていたのだ。祈りが応えられて妻は助かりました。でもそのとき私は主に感謝しませんでした。その後、主に逆らい続け、罪を犯し続けていた。それでも主は見捨てずに、私たちを救いたいと願って関わり続け、妻のことがあつてから六年して私は主に出会い、この方を救い主であると告白するに至りました。

菅原道真は人に取りついて死に至らしめる「たたる神」として恐れられました。しかし、聖書の神は違います。真の神はだれであるのか。私たちとを救うことのできる神はどなたであるのか。そのことを教えるために、あえて苦しみにあわせることがある。神は私たちを救いたいのです。

神である主をよくわからない、という方もおられるでしょう。私は主の前にふさわしい者ではないと思っている方もいるでしょう。いいのです。いまのままの状態でよい。わかっているもあるいはわからなくても、主に祈るならば、主は応えてくださる。神の恵みはどなたの上にも等しく注がれていることを覚えていただきたいと願います。